

## 亀岡の事件について

## OPINIONS

「地獄への道が、善意の敷石からはじまることもある。」

(16世紀のことわざ)

一方、亀岡の場合は、放置された犬の群れがうろつきまわ中、強者が弱者に襲いかかります。どれもが半ば野生化しており、簡単にさわれるのは、93頭のうち5頭にすぎません。一般の家族がやって来て、「フレンドリーなペット」として1匹連れて帰るなんて、およそ考えられないことです。彼らは、一度も外に出されず、散歩に行ったこともなければ、まともな扱いを受けたこともありません。実際、誰かがさわろうとしても、手のつけようがなく、パニックに陥るだけでしょう——塀をよじ登ろうとするもの、隅にうすくまって震えるもの、恐怖のあまりに「失禁」するもの……など。その上、大半が、(1歳以上の犬に取りつくダニによる皮膚病で、長期治療が必要)アカラスにかかっているのです。深刻な健康問題を抱えた精神分裂症的な動物を飼いたいと思う家族などいるはずありません。リハビリに要する手間ひまと費用、それに、莫大な医療費を負担しようという奇特な人がどこにいますか。

飼い主の女性が事故にあった12月初め以来、誰からも援助の申し出もなく、里親希望者も現われていません。いつもながら、感傷主義者は(不言実行ならぬ)「有言不実行」で、批判はしても、自ら手を下そうとはしないものです。代わりに、アークのスタッフ4、5名が、極寒の中、毎日現地まで出かけ、何時間もかけて糞を始末したり、出来る限りの世話をしています。メス犬の大多数は乳首がふくれており、それは、彼らがそれぞれ数匹の子犬を出産したという証拠なのです。もしも、その全部が生き延びていたとすれば……「恐怖の現場」には94頭どころか500以上の犬がひしめいているはずです。新しく生まれた子犬は、飢えた成犬に食われてしまったのでしょうか。

アークは、24頭の犬と6匹の猫を引き取りました。あの子たちを「社会復帰」させるまでには、長い時間と莫大な医療費を要することでしょう。あら探しに躍起となっている連中は、問題の本質を問うことにこそ精力を注ぐべきではないでしょうか。すなわち、なぜ、このようなケースが起こり得るのか、人道的に対処できる総体的制度はないのか、日本の動物福祉がこんなにもお粗末なのはなぜか……根本原因の解明に力を入れていただきたいものです。

エリザベス・オリバー NPO法人「アーク」代表

「亀岡市内の住宅に放置され、悲惨な境遇にある犬を動物愛護NPOがやむをえず安楽死させている」という記事が読売新聞(2003年1月24日)に掲載されるや、予想通り、「感傷主義にとらわれる人たち」から非難の声が殺到しました。(たとえ、どんなに費用がかかっても、新たな悲劇を招く結果に終わろうとも、何が何でも動物を「助けたい」と願う個人や団体からの抗議です。)しかし、見当違いの結論の多くは、私どもが直面している厳しい現実と、動物が置かれた恐ろしい状況が十分に理解されていないことから来るものと考えます。

1997年に富山で起きたケースと比較される方もあるでしょう。血液製剤の実験に犬を使っていたブルー十字という会社が破産しました。試験室のケージには400頭以上の犬が残されましたが、いくつかの動物愛護団体が駆けつけて、彼らにきちんとした(と思われる)受け入れ家庭を世話したというものです。

しかしながら、2つのケースは、まったく異なっています。ブルー十字の犬は、すべて(日本人に好まれる)純血種で、人に慣れていました。(動物実験用には、おとなしくて、扱いやすい犬だけが選ばれるのです。)飼育環境も、「ぞっとするような劣悪な場所」ではなく、設備の整った清潔な試験室で、健康な犬がそれぞれ個別のケージに入っており、会社倒産後も、同じスタッフが引き続き世話をあたりました。このような場合は、里親も見つかりやすいのです。